

本学会及び会員による「スポーツと性の境界」に関する研究業績情報（2025年3月更新）

トランスジェンダーのアスリートやキャスター・セメンヤ選手が提訴した裁判など、スポーツとセクシュアリティ、性の境界について注目が集まっています。これらが契機となって理解が進むことは歓迎すべきことですが、一方で、知識不足と偏見による差別的な言動が看過できない状況となっています。

本学会には、スポーツとセクシュアリティに関する専門家も多く、『スポーツとジェンダー研究』誌等に蓄積された研究成果は多数に上ります。以下のリストは「スポーツと性の境界」に関する本学会及び会員による2012年以降の研究業績リストです。なお、学校体育とセクシュアリティに関する研究業績はこのトピックには含まれていません。

これらの研究成果が活用され、スポーツとセクシュアリティに関して、高い人権意識と科学的知見に基づいた認識が社会に広まることが期待されます。

1. 『スポーツとジェンダー研究』及び学会関係の出版物

(1) 『スポーツとジェンダー研究』

J-STAGE で公開されていますが、最新刊については発行と J-STAGE での公開時期に数ヶ月のズレがあります。 <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/sptgender/-char/ja>

岡田桂（2024）「スポーツ競技と性／公平性の境界：競技“カテゴリー”の妥当性を問う議論」 Vol.22 pp.53-57.

藤山新（2023）「『20年』のその先へ」 vol.21 pp.4-5.

榎田美雄（2023）「オリパラの再編統合と“セメンヤ選手問題”-“東京2020オリパラ競技大会”の社会学」 vol.21 pp.44-56.

井谷聡子（2021）「本シンポジウムの背景と性別確認検査・高アンドロゲン症規定の概要」 vol.19 pp.22-26.

パヨシュニ・ミトラ（井谷聡子訳）（2021）「世界陸上と誤った優先順位—より安全な場か、公平な競争の場か—」 vol.19 pp.27-35.

アネット・ネゲサ・パヨシュニ・ミトラ（井谷聡子訳）（2021）「アネット・ネゲサへのインタビュー（聞き手：パヨシュニ・ミトラ）」 vol.19 pp.36-44.

建石真公子（2017）「アナイス・ボウオン『スポーツ競技における女性性確認検査（性別確認検査）—X分類の歴史—』」 vol.15 pp.98-106.

松宮智生（2015）「総合格闘技におけるトランスジェンダー競技者の事例—競技への参加資格と競技の公平性を中心に—」 vol.13 pp.164-165.

來田享子（2015）「スポーツは性を分けて競技する必要があるか」 vol.13 pp.165-168.

石田依子（2015）「アメリカ合衆国のモータースポーツ界におけるトランスジェンダー女性及び女性ドライバーの受容」 vol.13 pp.169-179.

コーディネーター：井谷恵子（2012）「大会報告：シンポジウム ジェンダー研究のフロンティア—スポーツにおける性別二元論の行方—」 vol.10 pp.40-44.

(2) 『データでみるスポーツとジェンダー』日本スポーツとジェンダー学会編, 2016, 八千代出版.
井谷聡子・來田享子「スポーツとセクシュアリティ」 pp.150-175.

(3) 『よくわかるスポーツとジェンダー』飯田貴子・熊安貴美江・來田享子編著, 2018, ミネルヴァ書房.
以下は、スポーツとセクシュアリティ、性の境界に関してコンパクトにまとめられているページです。

飯田貴子「スポーツとジェンダー・セクシュアリティ」 pp.2-3.

岡田桂「男らしさとセクシュアリティ」 pp.10-11.

建石真公子「スポーツにおける両性の『平等』と『公正』とは」 pp.4-5.

岡田桂「ゲイゲームズ・アウトゲームズ」 pp.134-135.

結城和香子「ソチ冬季大会の同性愛問題」 pp.138-139.

來田享子「性別確認検査」 pp.150-151.

藤原直子「総論：脱異性愛主義を目指して」 pp.166-167.

松宮智生「性を変えたアスリート」 pp.168-169.

井谷聡子「二つの性に分けられぬ身体」 pp.170-171.

飯田貴子「ホモフォビアとトランスフォビア」 pp.172-173.

藤山新「参加を保証するための指針」 pp.174-175.

井谷聡子「リオ・オリパラに見る性的マイノリティ」 pp.178-179.

2. 上記1以外の会員による研究

(1) 井谷聡子会員

井谷恵子・井谷聡子・関めぐみ・三上純 (2025) 『どうして「体育嫌い」なんだろう—ジェンダー・セクシュアリティの視点が照らす体育の未来』大修館書店.

井谷聡子 (2024) 「トランス排除の潮流—脅かされているのは『女子スポーツ』ではない」『世界』983 : 59-66.

井谷聡子 (2024) 「「パリ 2024—女子ボクサーへの複合差別からトランス差別と「女性解放」を考える—」『ひょうご部落解放』189 : 29-39.

井谷聡子 (2024) 「スポーツにおける女性差別とトランスジェンダー排除の関係性」社会学評論 74(4). 624-642.

井谷聡子 (2023) 「Q14 トランスジェンダー女性による女性スポーツ参加をどう考えたらよいでしょうか」浅井春夫ほか (編著). Q & A多様な性・トランスジェンダー・包括的性教育 バッシングに立ちむかう74問. 大月書店, pp.66-68.

井谷聡子 (2023) 「トランスジェンダー・アスリート—ヘイトと栄光の狭間で」福音と世界 2023年5月号 pp.36-41.新教出版社.

井谷聡子 (2023) 「トランスジェンダーの選手について異なる議論をしよう」GQ 2023年3月号 p.62.

井谷聡子 (2023) 「スポーツとLGBTQ+」たのしい体育・スポーツ No. 327 pp.60-63.

井谷聡子 (2022) 「キャスター・セメンヤ—それでも彼女について語る—」山本敦久編著『アスリートたちが変えるスポーツと身体—未来—セクシュアリティ・技術・社会』.岩波書店, 3-33頁.

- 井谷聡子 (2021) 「近代スポーツと科学、性別」 副音と世界 2021年8月号 pp.24-29.新教出版社.
- 井谷聡子 (2021) 『〈体育会系女子〉のポリティクス—身体・ジェンダー・セクシュアリティ』 関西大学出版.
- 井谷聡子 (2020) 「スポーツと警察・脅威—人種とジェンダーの視点から—」 現代スポーツ評論 Vol.43 pp.91-97.
- 井谷聡子 (2020) 「男女の境界とスポーツ—規範・監視・消滅をめぐるボディ・ポリティクス—」 思想4月号 (No. 1152) pp.156-175. 岩波書店.
- 井谷聡子 (2020) 「スポーツイベントにみるセックスとジェンダー」 体育の科学 Vol. 70 No. 6, pp.417-421.
- Itani, Satoko. (2020) "The 'Feminist' Discourse on Trans Exclusion from Sports" ジェンダー研究 Vol.23 pp.27-46. お茶の水女子大学ジェンダー研究所.
- Chawansky, Megan. & Itani, Satoko. (2016) Sexual/sexualized bodies. In Andrews, D., Silk, M. & Thorpe, H. (Eds.), Routledge handbook of physical cultural studies. pp.150-158. London: Routledge.
- Sykes, Heather. & Itani, Satoko. (2012) Gendering running, gendering research: A collaborative trans narrative. In F. Dowling, A. Flintoff, and H. Fitzgerald (Eds.), Stories of difference in physical education, youth sport and health. pp. 94-100. NY: Routledge.

(2) 岡田桂会員

- 岡田桂 (2023) 「トランス女性アスリート、『公平性』とは」 2023年8月9日夕刊、朝日新聞 (電子版) <https://www.asahi.com/articles/DA3S15713453.html>
- 岡田桂 (2022) 「性の境界とスポーツ：トランスジェンダー／性分化疾患／“性別”概念の変容」 岡田桂・山口理恵子・稲葉佳奈子 『スポーツと LGBTQ+：シスジェンダー男性優位文化の周縁』、pp.86-106. 晃洋書房
- 杉山文野・岡田桂 (2022) 「トランスジェンダー・アスリートと性別二元論」 竹崎一真・山本敦久編 『ポストヒューマン・スタディーズへの招待：身体とフェミニズムをめぐる11の視点』 pp.20-53. 堀之内出版.
- 岡田桂 (2022) 「トランスジェンダー・アスリートとスポーツの臨界：身体の多様性と公平性のどこに境界線を引くか」 体育の科学, 2巻8号 pp.522-527. 杏林書院.
- Kei Okada (2021) "Tokyo Olympics and Sexual Politics: Changes in Sexual Minorities Policies and Homo-Nationalism in the Lead-Up to Tokyo 2020", A. Niehaus, K. Yabu (Editor), 'Challenging Olympic Narratives: Japan, the Olympic Games and Tokyo 2020/21' pp.247-267, Ergon-Verlag.

(3) 建石真公子会員

- 建石真公子 「性別変更における生殖不能要件の合憲性—性同一性障がい者特例法1条3項と『自己の意思に反して身体の侵襲を受けない自由』(最高裁判所大法廷2023年10月25日決定)」 国際人権35号(2024年) (pp.73-75)
- 建石真公子(2024) 「ヨーロッパ人権裁判所における DSDs アスリートの権利の保護と限界 —キャスター・セメンヤ対スイス事件に関するヨーロッパ人権裁判所2023年7月11日判決 (Mokgadi Caster Semenya v. Switzerland, no. 10934/21)について—」、『令和5年度 日本スポーツ協会スポーツ医・科学研究報告 IV』

(pp.32-39)。

建石真公子「トランス・ジェンダーの性別記載変更と私生活の尊重 不妊化要件と身体的完全性および性アイデンティティの権利 —A.P.,ギャルソンおよびニコ判決 : A.P., Garcon and Nicot v. France, 6 April 2017 人権判例報 3号 (2021年) (pp.45-53)

(4) 来田享子会員

来田享子 (2022) 「トランスジェンダー選手の参加をめぐる議論の現状—平等と公平の狭間で—」 GID (性同一性障害) 学会雑誌. 15 (1) : 7-17.

来田享子 (2020) 「『オリパラ教育』を考える—ジェンダーと SOGI の視点から—」 季刊セクシュアリティ 97 : 28-37.

来田享子ほか (2018) 「平成 29 年度 日本体育協会スポーツ医・科学研究報告 II スポーツ指導に必要な LGBT の人々への配慮に関する調査研究—第 1 報—」

https://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data/supoken/doc/studiesreports/2001_2020/H2902.pdf

来田享子ほか (2019) 「平成 30 年度 日本スポーツ協会スポーツ医・科学研究報告 I 「スポーツ指導に必要な LGBT の人々への配慮に関する調査研究—第 2 報」

https://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data/supoken/doc/studiesreports/2001_2020/H3001.pdf

来田享子 (2012) 「指標あるいは境界としての性別—なぜスポーツは性を分けて競技するのか」 杉浦ミドリ・建石真公子・吉田あけみ・来田享子編『身体・性・生—個人の尊重とジェンダー』 pp.41-71. 尚学社.

来田享子 (2012) 「1968 年グルノーブル冬季五輪における性別確認検査導入の経緯—国際オリンピック委員会史料の検討を中心に—」 楠戸一彦先生退職記念論集刊行会編『体育・スポーツ史の世界—大地と人と歴史との対話』 pp.103-118. 溪水社.